
愛ノ花は咲き乱れる

靴下ちゃん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛ノ花は咲き乱れる

【Nコード】

N5016Z

【作者名】

靴下ちゃん

【あらすじ】

天使の国「スワル」、悪魔の国「ロゼリーデ」——かつて敵対していたこの二国はある世代で一変する事になる。信賴していた伯父の死、そして発覚する数年前から決まっていた自分の未来。17歳のシャーリスは19歳にして若き王——悪魔の王と結婚する事になってしまった。美しく、気高く、冷たい氷のような王に戸惑いつつもシャーリスは惹かれて行くが……

プロローグ（前書き）

「愛ノ花は咲き乱れる」

長編ですが、よろしくお願いします。

プロローグ

「――シャーリス、こっちへおいで」

「はい、おじい様」

シャーリスと呼ばれた少女は全速力で――の元へと駆けて行く。

「おやおや、そんなにスピードを出したら危ないぞ？」

「だいじよぶだよー！…ってきやあ！」

シャーリスは盛大に音をたてて転んだ。

「大丈夫かい！？」

するとシャーリスは起き上がり、何事もなかったように汚れた膝をはたきながら笑った。

「シャーリスは強いから泣かない！」

すると――も安心したように笑う。

「そうだよ、シャーリス。お前は強くならなきゃならない。」

「うん！わかった！」

「良い子だ…その笑顔を、その心をいつか…その時がきても忘れな
いでほしい。そうしていればきっと幸せになれる。」

だが、シャーリスは、『おじい様何言ってるの？』と首をかしげた。

そんなシャーリスを見て、ふっと笑うと少し引き寄せて頭をなでる。
シャーリスはその大きな手のぬくもりが心地よくて顔をまたもや歪
ませた。

「へへー、おじい様大好き」

「わしも大好きじゃ、愛しい孫よ…」

突然の決定事項 01

―おじい様が死んだ。

『おじい様が死んだ』ということはこの国、「スワル」の王がいなくなったということだ。おじい様は国民から絶大なる信頼を受けていた。何事にも最初に民のためを思って行動し、自分の道に迷った者がいれば身内、騎士、民と差別なく手助けしてきた。時々城を抜け出しては馬で町を駆け回り、夜の食事の席ではいつも笑いが絶えることはなかった。

それがおじい様、シュワルⅡナイザス王であった。

「あああつ！お義父さまっ！何故目を覚まさないのですか！？」

―やめてよお母様

「父上……っ」

―お父様まで

「ああ、王様！私たち民は貴方様の事を一生忘れはしません！」

―お願いだから……っ

「やめてちょうだい！」

その声に葬式にいた全員が声のする方を向いた。

「姉さん！」

弟が今まで出した事もないような声をあげた。でもそんなのはシャ

ーリスの心に届いてさえいなかった。

「…おじ…いさま…」

シャーリスは両手を握りながら眠っている昨日までの王を見てつぶやく。その声は風の吹く音さえ聞こえない講堂にいつまでもこだましていた。

そこにいたシャーリス以外の全員が息をのむ。なぜなら…わかつていたから。

シャーリスはしゃがむとその老人の顔を見て目を細める。

口元が…笑っているように見えた。

それを見て安心して、でも納得できなくて、シャーリスはしばらく息がとまったように苦しくなった。

そして、突然立ち上がるとドレスのすそも気にせず走って講堂から出ていく

でも誰も止めなかった。何故なら…わかつていたから。知っていたから。

—彼女が誰よりもあの愉快な老人を愛していたことを

あれから一週間がたった。

あんなに国を揺るがす事があったって、鳥はいつものように鳴き、

庭園の薔薇は花を咲かせる。

時はとまらなかった。

ーコンコンコン

ノックの音がしてシャーリスはドアを見た。

「シャーリス様、お茶の時間ですがどういたしますか？」

そう言われて、シャーリスはドアに向けていた視線を窓の外にうつす。太陽は高く昇っていて雲一つない。その完璧な空がシャーリスにはうっとおしいとさえ思う。

「ええ、いただくわ。中へお入りなさい。ステイミー」

「…失礼します」

そしてドアを開け、紅茶のポットやティーカップ、お菓子などがのったカートを押したステイミーがはいつてくる。

ステイミーはシャーリスの小さい頃からの側近メイドでもあり親友でもあった。

「…泣いたのね」

「……っ！すみません！」

ステイミーの目は腫れていた。

もともとステイミーは捨て子だった。死にそうな所をおじい様に助けられ一命は取り留めたが、しばらく城で看病する事になり、しょっちゅうおじい様についていたシャーリスはお見舞いに行くうちにだんだんとステイミーと仲良くなった。完治した頃にはおじい様がステイミーにこの城のメイドになること、シャーリスの側近になる

という話を持ちかけ、はれてステイミーはシャーリスつきのメイドとなったのだ。

それからどこに行くのも一緒だった。おじい様は私たち二人をものすごくかわいがってくれて、ステイミーは以上なほどにおじい様をしたっていた。

「ステイミー…」

シャーリスは立ち上がってうつむいているステイミーをそっと抱き締める。しばらくするとドレスの胸のあたりがしめってきていた。

「すっすみま…せっ」

「いいのよ」

シャーリスは抱きしめる腕に力を込める。

「おっ王様の事を思い出すとっ…涙があふれってきて…て、しごとできな…いっし、ねれないしっ…」

「…うん」

「おっさらいっぱい割っちゃうし…っ何より、しゃーりすっさまの事を考えるとっ…!」

「……」

そこまでいったステイミーはシャーリスの腕の中で固まった。

「すっすみません…」

「…いいのよ」

「でもっ!」

「…あのね、ステイミー。聞いてくれるかしら？」

するとシャーリスは抱きしめていた手を離し、ステイミーも一緒にソファの上に座らせた。

しっかり目を合わせて、シャーリスは話始める。

「私、おじい様がなくなってから一度も泣いていないの」

「……それはっ」

「涙が…でないの」

「……」

「何か、おじい様の事考えると体全身がからっぽになるというか…水分が抜けていく感じになっていくの。」

「シャーリス様っ」

「まだ…いるのよ。私の心の中に、頭に…信じられないの」

「ステイミーはまたもや大粒の涙をこぼしていた。」

「ああ、泣かないでステイミー…はは、今も私は…からっぽだけど…」

「シャーリスさまっ!」

ステイミーがシャーリスの体を抱きしめようとしたその時、

「姉さん!」

ノックもせず、シャーリスの弟、ウィレルが部屋に入ってくる。

「これはっ、ウィレル様!」

ステイミーは急いでソファからどき、シャーリスのななめ後ろに立った。

「ステイミーもいたのかい!？ 丁度いい、一緒に来て!」

「いったいどうしたの!？ そんなに慌てて?」

ついにシャーリスが口を開く。ウィレルはさっきまでの慌てた顔ではなく、真剣な顔つきで姉を見やった。

「おじいさんの…先代王の遺書が見つかった」

「…!」

シャーリスとステイミーは絶句する。

「ボーっとしている暇はないんだ！講堂に親戚や大臣たちがみんな集まってる！行くぞ！」

するとウィレルはソファに座るシャーリスの腕をつかみ走り出した。後からステイミーが付いてくる。

シャーリスは…胸騒ぎがしていた。

02 (前書き)

お気に入り登録ありがとうございました(*^|^*)
これからもよろしく願いいたします(^.^)♪

「今、皆に集まってもらっている理由は他でもない」
お父様の言葉にそこにいた全員が息をのむ。

「私の父―先日亡くなられたシュワルⅡナイザス王の遺書が見つかった。調べてみたが字はシュワル王直筆のものであった。また、王専用の隠し部屋にあったらしくこの遺書は本物と見なす」

「……」

誰もざわつこうと思った者はいなかった。静寂が講堂をつつみこみ、新しく王となったお父様の声が喋るたびに、耳に波打つような振動が聞こえる。

「父上は：シュワル王はいくつもの言葉をこの遺書に書きつるした。それを今からここで読み上げたいと思う」

―講堂に少し張りつめた空気がはしった。

「ゴホンッ！では読もう：『親愛なる人達へ この手紙を読んでい
るということはきっと私はこの世からいないんだろう。新しい王は
私の自慢の息子、ケネディかな？君は生まれた時から実に頭が良か
った！お父さんは何も心配することがなかったよ。いい奥さん、エ
ミリアまで手に入れて君の人生はもう最高ということをお父さんが
約束しよう。』：っ」

誰もがわかった。お父様が鼻声になっている事が。

『そして、ウィレル！私のかわいいわがまな孫！君はチョコレ
トが大好きだったね？私の秘蔵コレクションをあげよう。私の部屋
の本棚を開けて、右から七番目の本を押すとダーツの横の扉が開い
て極上のチョコレートが中に入っているよ。くれぐれも食べ過ぎな

いように。

次は…ステイミー！君を拾った時は本当にドキドキしたよ。今にも心臓が止まりそうだったからね？それから…シャーリスといつまでも仲良くしてやってくれ。』

ステイミーの瞳から先ほどよりも大きな粒がボロボロとあふれだすのが横からでもわかる。

そして、身内から使用人までおじい様のお言葉は続いた。終わりが近づいてくると大臣や使用人達の泣き声もだんだんと大きくなっていき講堂がまたもやあの葬式のようになった。が、今回は少し違う気がするのはいかのせい、皆の泣き声がシャーリスには少し変わって聞こえた。

葬式の時みんな絶望的な声で泣いていたが今回は違う…少し…ほんの少しあたたかくて…次の希望を見つけるような泣き方。

泣けない私には…あまりわからないのだけど…

『そして最後に―シャーリス、シャーリス…ナイザス！』

その名前に誰もが反応し、静かになる。シャーリスは席を立て、読み上げる父親を見つめていた。

だが…胸騒ぎがしてたまらない。何故だろう？何故こんな気持ちに…

『シャーリス、君は悪魔の国、ロゼリーデの王子の所に嫁に行くんだ』

『きつといきなりの事で驚いているだろう…だが小さい頃おじいちゃんと約束しただろう？笑顔を忘れないと』

「…」

『では以上で私の遺言は終了だ。皆、幸せに生きなさい』

そこでおじい様の遺言は終了した。お父様が遺書をたたむ音だけが響きわたる。

誰もが…絶句していた。

「シャーリス王女の結婚についてだが…至急会議を行う。大臣たちはすぐ用意するように。こちらはまだ今は調査中である。くわしい事は状況が確認できてから話そう」

漠然とした講堂にお父様の声がやけに響く。でもその声は…

震えているような気がした。

「お父様！それはどういう…！？」

「シャーリス、大丈夫だ。部屋で休んで…」

「これが部屋で休んでいられるものですか！？ロゼリーデ…？悪魔…？それはきつとおじい様の遺言ではないはずです！おじい様ならそんな結婚なんて言い出さないはず！ご存じでしょう？私達は…：天使なのですよ！何年間も悪魔と…あの国と敵対していたのはいやでもわかつているはず！なら何故…！」

「シャーリス、落ち着け」

「落ち着いてなんていられません！私はその王子に会った事もなければ、悪魔自体にも会ったことはありません！第一、私には許婚がいるでしょう？彼の事はどうするんですか！？」

「…誰かシャーリスを部屋まで」

「お父様！話は終わっていませんわ！」

シャーリスは父の所まで行こうとする。だが、それを二人の男がとめた。

「王女さま、部屋へ戻りましょう」

「いやよっ…！」

「…失礼します」

するとシャーリスは両腕を片方ずつつかまれてしまった。

「何をするの！？」

「王様のご命令です。部屋へ戻って休まれましょう」

「そんなのっ…」

抵抗してもシャーリスには無駄であった。二人の男は体格がよく、シャーリスなんてひよいと持ち上げてしまう。

「いっ痛い！離してよ！」

皆の視線とステイミーの叫び声が私にささる。だがもう、それでもシャーリスにはどうでもよかった。

「おじい様…何故こんな事を…」

考えているうちに頭がくらくらしてくる。ヤバイと思った時にはもうその場に倒れてしまっていて、ステイミーの叫び声がよいけいボリユームを増す。

「ああ、どうして…？」

そこで私の意識は途切れた。

シャーリスが目を覚めたのはもう日が沈みかけている頃だった。体がまるで何かに打ちつけられたように痛む。だがシャーリスは無理やりベッドから身を起こした。

何が…あつたの…？

途切れ途切れの記憶。シャーリスは頭を抱えた。

そう、確かおじい様の遺書が見つかって…ウイレルにはチョコレートで…ステイミーが泣いていたわ…それで私は…

「…悪魔…との結婚…」

シャーリスはもう一度ベッドに倒れこんだ。今はきつと会議が行われている所だろう。

―あの時はひどく取り乱してしまった。お父様も混乱していただろうに…王女として情けないわ！でも…おじい様が何を考えているか私にはさっぱりわからない。だって相手は…悪魔なのよ！

―悪魔と天使。それは真逆の存在。長年敵対してきた相手。そこに嫁がせようと言うのか。

シャーリスは部屋にあった一冊の本を取り出した。

「神と天使と悪魔」

この本は天使と悪魔、またそれを作り出した神の事がのっている。

天使か悪魔に生を受けたものならば、誰もが一度は目を通すものだ。貴族や王族が通う学校に行っていた時はよく目を通していたが、卒業した後は一度も目を通していなかった。

シャーリスはためらいながらもその本を開けた――

昔、約三千億年も前、第二百十代目の神、シュワイツがいた。シュワイツはひどく適当な性格だったという。

「善人には天国へ、悪質な人生を送ってきた悪党には地獄へ送る」

これが神の仕事だった。

シュワイツはいいやいやながらも仕事をしていた。だが、ある時彼は恋をしてしまったのだ。

相手は地獄に送られるはずだった元女王、エレクシア。彼女は金におぼれ、民をコケのように扱い、ついには権力ほしさに夫、つまり王まで殺そうとし、処刑された女だった。

だが、そんな彼女の美貌にシュワイツは夢中になってしまった。エレクシアを地獄には送らず、常に自分の見える場所に置いた。

そして彼は仕事をしなくなった。

彼が仕事をしなくなった事で天界に來た人々は、天国にも地獄にも送られずさまよった。

最初のうちはシュワイツも無視していたが、その数は何億人にもなり、自分の城の前までうろつくようになったのでさすがに危機感を感じた彼はまた仕事を始めた。だが。何億人もの死者を彼は一人

で処理できなかったのだ。そして彼は生み出した。そう、

―天使と悪魔を―

天使には天国を、悪魔には地獄の仕事を彼はさせた。彼らはシュワイツの予想以上に働いた。おかげで何億人もの死者は一瞬で片付き、邪魔をされなくなった神シュワイツは有頂天だった。だがそれがいけなかったのか。彼はこう思うようになっていた。

『もう、天使と悪魔に任せればいいんじゃないか…？』

そしてシュワイツはこれを実行してしまったのだ。当然のことながら天使と悪魔は、自分を生み出したシュワイツには逆らえない。

そして天使と悪魔が天界を管理し、神シュワイツは愛する人と四六時中共に生活する日々が始まったのだった。

でもこの時彼は気づいていなかったのだ。もう、天使と悪魔という自らが作り出した存在が、感情、という物を持ち始めていたのを。

‘感情’を持ち始めた彼らは、神シュワイツの事をなんとなく思っただろうか？

天使と悪魔。それは人間に近くて遠い者。容姿は人間そのものだが、中身の能力や技術は違う。

彼らは学習した。

―人間界の技術を

彼らは情報を仕入れた。

―死者から聞きだして

そして彼らはわかってしまった。

―神に利用されているという事が…

だが、天使と悪魔はシュワイツにやはり何も言わなかった。

「神は一瞬で自分達を消しされる」それが怖くてできなかったのだ。

―だが、シュワイツに不運な事が起きる。

シュワイツは天界から逃亡したのだ。愛するエレクシアと共に。

―駆け落ち

そう言った方がいいだろう。

けれどもシュワイツは知らなかった。神は一定の距離、天界から離れると力が使えなくなる。それはつまりふつうの死んで天界に来てしまった人間と同じ扱いになるという事なのだ。

シュワイツを黒い闇が包み込む。彼は天国へは行けなかった。そしてエレクシアと一緒に、地獄へ落ちたという。

さて、このシュワイツの事件を聞いた天使と悪魔はどうしただろうか。

‘感情’を持った彼ら。そして神を憎みながらも反抗できなかった彼ら。そしてついに邪魔となる神が消えた事で彼らはどうしただろうか。

答えは『何も起きない』だ。

シュワイツが消えて、喜んだ人々は多かったが得に何か起こるわけでもなく彼らはただ天界に来た死者の処理という仕事をし続けてきたのだ。天界はそのころとても穏やかだった。

そしてどのくらいたっただろうか。リーダーというものができた。

仕事にはリーダーというものがないと成り立たない。なので彼らは悪魔に一人、天使に一人、中心となる人物を作った。

そしてある時、彼らの考えが食い違ってしまったのだ。

最初はケンカのような物だった。だが、事態はどんどんエスカレートしていく。そして丁度その頃彼らは死者からあることを聞き出していた。

―戦争、それは人間界で起こっている恐ろしいものだった。

戦争で死んでしまった人達がその頃、死因として圧倒的に多く彼らは多くの情報を仕入れる事ができた。

そしてついに、戦争が起こってしまったのだ。

天使と悪魔はそれぞれのリーダーを王とし戦争を始める。そしてそれはその先もずっと続いていったのだ。――

そこまで読んでシャーリスは本を閉じた。

今は「戦争」というものは、お互いの仕事や事情もあって行われていない。

だが、時々ロゼリーデにスワルの住民が拉致されたという噂もあり、どちらにも戦闘態勢は整っていると聞く。

天使と悪魔が死んでしまった場合、その先にあるのは地獄でも天国でもない「消滅」だ。

そのかわり、平均寿命は1000年という長さだし、シャーリスはまだ17歳であった。

「シャーリス様、皇帝陛下がお見えになりました」
ステイミーの声が聞こえて、シャーリスは慌てて本を元にあった場

所に戻す。

「お通ししてちょうだい」

そして、ドアが開き今となっては王になった父が現れる。

「お父様、先ほどは取り乱してしまって申し訳ありません」

「いや、大丈夫だ。突然でお前も驚いたはず、面をあげなさい」

シャーリスは言われた通りに顔をあげた。だが、そこにはいつもあたたかくて優しい表情の父はいなかった。代わりに、自分の目の前には困惑して自分と目を合わせているようで違う所を見ている父がいた。

「お父…」

「シャーリス」

言葉は遮られてしまう。だがシャーリスは構わず続けた。

「お父様、私の結婚という話はどうなったのでしょうか？」

それを聞いて父の口もとは何か言おうとしているのだが、言い出せないとはかりにパクパクしていた。そして、やっと喋ったのはしばらくしてからだった。

「シャーリス、君はロゼリーデの国の王と結婚しなければならない」

「あの遺書はやはり本当だったのですか…!？」

「……」

父はもう何も言わなかった。シャーリスもこれから自分を待ち受ける運命に頭がフラフラとする。

「二日後の夜…顔合わせも兼ねて夜会をすることになった。…その王も一緒に」

「…!それは、どういう事なので…」

「とにかく」

またもや遮られシャーリスはよほど父の気が立っている事に気づく。

「二日後はお前の結婚相手も来る。失礼のないように」

すると父は部屋から出て行った。

その後も、シャーリスは黙ってドアを見つめ続けていた。

03 (後書き)

読んでくださりありがとうございます

お気に入り登録ありがとうございます／（＾Ｏ＾）／

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5016z/>

愛ノ花は咲き乱れる

2012年1月13日01時46分発行